

田口律男著 『都市テクスト論序説』

波瀲, 剛
九州大学大学院比較社会文化研究院助教授

<https://doi.org/10.15017/8509>

出版情報 : 九大日文. 8, pp.108-109, 2006-10-01. 九州大学日本語文学会「九大日文」編集委員会
バージョン :
権利関係 :

◎書評

田口律男著『都市テクスト論序説』

NAMIGATA
波瀾
剛

目を惹く本だった。書店で平積みになっていたとき、白のシンプルな表紙が他のカラフルな本の間で目立っていたのが一つの理由である。近寄ってみて実際には単に白だけの表紙ではないことを知るのだが、さらに興味を持ったのは、表紙のシンプルさから想像していたときよりも、随分厚みがあることだった。

後日購入してゆっくり読み始めたとき、私の期待は裏切られなかった。本書は注釈作業や空間論・身体論の導入によって、物語の深層構造を浮かび上がらせるといふ従来の「都市論」的な読みにとどまらず、全体の構造を把握するという作業では見落とされがちな細部の記号や、分裂し曖昧さを内在した記号の両義性に注目することによって、テクストが示すダイナミズムを読み取っていく。これは「都市論」的アプローチの古典著となった前田愛『都市空間のなかの文学』からいかに歩を進めるかという格闘の軌跡であり、ついキワモノに興味が向かってしまう私からすればそれだけでも十分尊敬に値する。

こうした問題設定は、一九八〇年代における「都市論」プログラムの批判的継承を前提としている。すなわち、「都市論」とい

う枠組みを特権化することなく、「都市」や「都市空間」を文学テクスト研究の仮説概念としてとらえることは可能か、というのが本書の目指すところである。とはいえ、「都市論」プログラムの何もかもが否定されているわけではない。むしろブームの流れに埋没してしまった重要な視点をすくい上げようとする姿勢が随所に見られる。「前田愛の仕事にかぎっていうなら、もっと複眼的で厳密な検証が必要となるだろう」（二六頁）という観点に立ち、個々の分析において従来の「都市論」的アプローチと対話を試みるのが基本的な姿勢である。

新たな方法をうち立てようとしつつも、早急な議論に走る。ことなく従来の方法を辛抱強く検証するその慎重な手続きは本書全体で徹底されている。著者はタイトルの一部に「テクスト」という用語を採用しつつも、特権的な「作者」から「作品」を救済した結果として、「読者」による勝手な読みの横行、書中では「恣意的な読みのインフレーション」（二五頁）と呼ばれる状況に陥らないようにと配慮し、第一部の総論において、「都市テクスト論」を理論的に提示することから始めるのもその現れだといえる。

〈物語内容の審級における身体／都市／政治力学〉と〈物語言語の審級における表象／テクスト／読書行為〉との接合に関する議論が第一章で展開された後、第二章では「都市」という用語が日本で定着していく歴史のプロセスが明らかにされる。そして、この語が日本において成立し定着する過程が近代国民国家の趨勢と無縁ではなく、明治二〇年前後の「市区改

正」事業に関する議論と、大正期の「都市計画法」成立に至る議論とが起点となったという興味深い指摘がなされてゆく。こうして総論では、「都市テクスト論」の理論的枠組みと「都市」という用語そのものの歴史性とが考察の対象となっている。

続く第Ⅱ部の各論は四章立て、合計で二四本の論考から成る。それぞれの章は、「身体」「一九二〇年代・都市」「言説」「沖繩」を視座としている。第一章では、都市を実際に歩き諸物と出会う「身体」のダイナミズムが志賀直哉、芥川龍之介、江戸川乱歩、古井由吉の小説から読み解かれる。そして第二章では、新感覚派、とくに横光利一を軸として、「一九二〇年代・都市」の表象が分析される。ここでの議論は関東大震災後の東京を概観することに始まって、同時代の上海におけるアイデンティティ・ポリティクスの分析へと接続してゆく。なかでも都市、作家、作家と複数の次元において浮かび上がる両義性に注目して、前田愛の『上海』論へと挑む論考「横光利一『上海』論」は本書の中心となる部分とあってよいだろう。

『上海』論という折り返し地点を過ぎると、議論の対象が第三章では明治末〜大正へ、そして第四章では第二次世界大戦後〜現在へとシフトする。第三章は夏目漱石的を絞り、都市を生きる身体を経験する政治力学と、一九一〇年代における都市をめぐる「言説」の分析を接合した『彼岸過迄』論、さらに『行人』論、『こゝろ』論が続く。アイデンティティ・ポリティクスをめぐる議論がふたたび鮮明になる第四章では、空間をめぐる政治力学がポストコロニアリズムの視点と重なり合う。そし

て霜多正次、目取真俊による「沖繩」表象の分析を通じて、マインリティがいかに主体を立ち上げるべきかという戦略性が問われている。

本書の考察は従来の「都市論」ではなかなか扱われることのなかった「沖繩」にまで及ぶ。このような視野の広さは、「都市」とは、私たちの身体が諸物と出会うトポスであり、そこには身近な生活世界から世界システムまでがグラデュアルに内蔵されている（三六頁）という考えから生まれている。「お弁当」も「文学テクスト」も「都市」であるという指摘に最初は戸惑いもしたが、結果的に違和感を覚えることはなかった。それは本書の基本的なスタンスにぶれが生じないためだ。

しかし分析の力点は、第Ⅱ部各論の前半（二・三章）と後半（三・四章）で、いわゆる「都市」の「政治力学」から、「主体」の「ポリティクス」へと移動している。それにしたがって、言葉そのものに注目して「テクスト」のダイナミズムを吟味する作業は、「作家」を含む「主体」のダイナミズムへと移行する。このときの「作家」とテクスト論が克服しようとした「作者」とはどう違うのかについては自分のなかで解決できなかった。とはいえ個人的にはポストコロニアリズムと接続してゆく後半の議論にもかなり興味がある。早くも新たなレシビが待ち遠しい。

（二〇〇六年二月 松籟社 四七二頁 二八〇〇円＋税）

（九州大学大学院比較社会文化研究院助教授）